

論 説

パットナムのソーシャル・キャピタル概念再考

——共同体の美化と国家制度の役割——

北 井 万裕子

—目次—

はじめに

1. パットナムのソーシャル・キャピタル概念とその不完全性
2. 共同体の美化と類型の不完全性—フクヤマのソーシャル・キャピタル概念—
 - 2-1. 共同体の美化とそれに伴う理論的混乱
 - 2-2. フクヤマのソーシャル・キャピタル概念—正の外部性と負の外部性—
 - 2-3. 小括
3. 国家と制度の役割—スウェーデンのソーシャル・キャピタルと福祉国家—
 - 3-1. 普遍主義的福祉国家の機能
 - 3-2. スウェーデンのソーシャル・キャピタル

おわりに

はじめに

1990年代頃から近年にかけて、ソーシャル・キャピタル¹⁾ (Social capital) 概念は、急速に関心を集め、政治学や経済学、さらには社会疫学にわたるあらゆる分野で用いられている。ソーシャル・キャピタル概念が世界的に認知されるようになったきっかけは、ロバート・パットナム (Robert D. Putnam) による二つの著書であった。パットナムのソーシャル・キャピタル概念は、世界で最も知られるソーシャル・キャピタル論となり、日本もその例外ではない。日本におけるソーシャル・キャピタル論は、しばしば、パットナムのソーシャル・キャピタル概念を基礎に、共同体の再評価や、絆の概念として注目を集めている。しかし、それは一方で、日本でのソーシャル・キャピタル概念が、パットナム概念のみに依拠した一面的で楽観的な側面を持つと解釈することができる (渡辺, 2011)。

パットナムのソーシャル・キャピタル概念は、世界銀行が開発論において強く推し進めたこともあり、ソーシャル・キャピタルの定義、そして概念として最も浸透する一方で、定義そのものの曖昧さや実証の不十分さなど多くの批判がなされてきた。

本稿では、パットナムのソーシャル・キャピタル概念の批判的検討をとおして、以下二つの目的に取り組む。第一に、共同体の捉え方とソーシャル・キャピタルの性質の違いを考察することで、ソーシャル・キャピタルの類型概念をより精緻化する。第二に、国家制度がソーシャル・キ

ャピタルに対してどのような影響を与えるのかを明らかにする。特に本稿では、福祉制度に焦点をあて、ソーシャル・キャピタルの類型をふまえたうえで、その創造において果たす役割を提示する。この点は、パットナムによる社会中心論と共同体の位置付けが、福祉サービスの供給に関してソーシャル・キャピタルへの過度な期待を引き起こすという問題に関わる。福祉サービスの供給において、ソーシャル・キャピタルを過度に評価することは、社会排除につながるソーシャル・キャピタル (unsocial capital) を導きかねない。その一方で、むしろ、高水準の福祉供給を制度化する国家の機能が、ソーシャル・キャピタルの創造にポジティブな効果を与えるという側面について言及する。

上記の二つの側面から、パットナム概念を再考することは、ひいては、ソーシャル・キャピタル概念を媒介にした高水準の福祉制度と経済成長を両立する可能性を探求することへとつながる。

1. パットナムのソーシャル・キャピタル概念とその不完全性

パットナムは、ソーシャル・キャピタルを「調整された諸活動を活発にすることで社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」だと定義する (パットナム, 2001, p 206-207)。

『哲学する民主主義』において、パットナムは、活発なアソシエーション活動と民主主義統治の成功との間におけるつながりを明らかにしようとした。北イタリアでは州制度が民主的に機能し、南イタリアでは腐敗とともに機能不全に陥った背景として、その地域が「市民共同体 (Civic community)」であるかどうかによって左右されると考えた。

市民共同体とは、以下のような市民性を持つ共同体を意味し、このような共同体ではソーシャル・キャピタルが蓄積しやすいために、民主主義制度が成功すると述べる。

市民共同体であるかどうかを示す市民性の特徴とは、第一に、「公的諸問題への市民的積極参加」²⁾、第二に、「権威と従属の垂直的關係」ではなく、「互酬性と協力という水平的な人間関係」であること、第三に、連帯し、信頼しあい、互いの相違に寛容であること、第四に、内部で協力のための習慣や連帯、規範を育て、外部にそれらを波及させる自発的結社が活発であるということがあげられる (パットナム, 2001, pp 105-106)。

ソーシャル・キャピタルの蓄積は、拡大する傾向にあり、市民性が豊かな場合は、蓄積過程の好循環が形成される一方で、市民性が乏しい場合は、悪循環となりソーシャル・キャピタルは蓄積しない。その差異を説明する理論的背景に、経路依存性を置いている。

また、パットナムのソーシャル・キャピタル概念において、第一義的な役割を持つのが市民的積極参加のネットワークである。水平的な人間関係に基づく市民参加のネットワークを通して、互酬性の規範が強化され、社会的信頼が形成されると主張する。

パットナムによると、社会的信頼は、相互に関連しあった市民的積極参加のネットワークと互酬性の規範という源泉から現れる。特に、互酬性の規範には二種類あって、「あなたがそれやってくれたら、私もこれをしてあげる」という「特定の互酬性」と、「より価値がある一般的互酬性」³⁾に分けられる (パットナム, 2006, p 17)。³⁾ 一般的互酬性とは、「あなたからの何か特定の見

返りを期待せずに、これをしてあげる、きっと、誰か他の人が途中で私に何かしてくれると確信があるから」ということを意味する (パットナム, 2006, p17)。

パットナムのソーシャル・キャピタル概念は、連帯をもつ共同体が概念の基礎として非常に重要な位置を占めている点に特徴づけられる。それは、特に市民共同体の議論から明らかであるように、社会学の古典であるテンニエスによる「ゲマインシャフト (共同体) とゲゼルシャフト (社会)」の概念を批判して (パットナム・ゴス, 2013, p 12), 近代化に伴い共同体は解体されるのではなく、市民共同体で「連帯, 市民的積極参加, 協力, 清潔性」がみられると述べる (パットナム, 2001, p 138)。

また、後の著書『孤独なボウリング』では、アメリカにおけるソーシャル・キャピタルの衰退を実証的に提示するとともに、概念の類型について述べており、ソーシャル・キャピタルの性質の違いに言及した。

パットナムは、ソーシャル・キャピタルの形態の多様性を述べ、それらを分類する基準のなかで、「おそらく最も重要なもの」として「橋渡し型 (Bridging)」と「結束型 (Bonding)」の区別をあげた (パットナム, 2006, P19)。結束型ソーシャル・キャピタルは、内向きの指向を持って、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化する一方で、橋渡し型ソーシャル・キャピタルは、外向きで、様々な社会的亀裂をまたいで人々を包含するネットワークを持つ。すなわち、この二つはソーシャル・キャピタルをネットワークという形態で捉えた場合の類型である。

パットナムは、ソーシャル・キャピタルの蓄積が民主主義制度、うまく機能する政府、経済発展の成功の背景にあると主張し、さらに、『孤独なボウリング』では、教育や児童福祉、治安、健康に影響を与える重要な要素として、その働きを拡大した。ソーシャル・キャピタルは、社会のあらゆる問題を解決する、いわば万能薬のような扱いがなされている。

しかし、はじめにでも述べたように、パットナムの概念は、定義そのものや水平的な市民参加のネットワークが信頼を形成するという因果関係の正当性に対してなど、多くの批判が行われてきた (Sabatini, 2009)。例えば、マーガレット・レヴィ (Margaret Levi) による、パットナム概念の批判的検討は、まさに理論的欠陥の核心についており、パットナム概念の問題点を踏まえて、ソーシャル・キャピタル概念をより精緻化する方向性を示唆している。レヴィは、ソーシャル・キャピタルの起源 (Origins)、それを維持するメカニズム (Mechanisms)、そして、規範や市民参加のネットワークがよい民主的政府 (Good democratic government) をもたらすのかという三つの観点から、パットナムのソーシャル・キャピタル概念を考察した (Levi, 1996)。それら三つの観点から、パットナムの経路依存性の理解と扱い方が誤っていること、信頼の定義が不十分であることなどを指摘する。本稿では、レヴィ (1996) による指摘を議論の出発点としながら、特に以下の点について、さらなる検討を行う。第一に、共同体の美化と類型、第二に、国家と制度の役割についてである。

2. 共同体の美化と類型の不完全性—フクヤマのソーシャル・キャピタル概念—

2-1. 共同体の美化とそれに伴う理論的混乱

パットナムのソーシャル・キャピタル概念における第一の問題は、共同体の美化である。レヴィ（1996）は、以下のように指摘する。共同体でよくみられるような閉鎖的で密なネットワークは、極度に変化に抵抗し、それらは、信頼の源泉にもなるが、一方で外部者との間で不信を生み出す源泉にもなる。そして、そのような閉じたネットワークの維持は、イノベーションを阻害し、閉じられた経済の中での伝統を押し付ける。また、パットナムの主張は、非常に保守的であり、例えば女性の労働参加によって市民参加の一つが衰退したという因果関係を強く指摘しながら、女性による家庭内労働の制度的代替という側面に目を向けない（Levi, 1996）。

なぜ、パットナムが共同体を美化しているといえるのであろうか。それは、パットナムの市民共同体の理論とソーシャル・キャピタル概念との間で論理が整合的でないことから説明することができる。

パットナムの市民共同体とソーシャル・キャピタルの対応関係は以下のようにまとめられる。市民共同体では、平等で水平的な市民参加のネットワークを通して、信頼や互酬性の規範が形成される、すなわちソーシャル・キャピタルが蓄積する。一方、伝統的な共同体の人間関係は垂直的で、ヒエラルキーと搾取に支配されているため、連帯や信頼は形成されず、協力は達成されない。つまりソーシャル・キャピタルは存在しない。

しかし、ソーシャル・キャピタルの定義から考えると、上記の対応関係は、不完全である。なぜなら、パットナムは、ソーシャル・キャピタルを、自発的協力を可能にする規範、信頼、ネットワークといった社会組織の特徴と定義しており、この場合、ソーシャル・キャピタル概念のみに焦点を当てると、市民共同体の議論を踏まえた上記の対応関係よりも、より広義に捉えることが可能だからである。実際には、パットナムの市民共同体の理論に反して、伝統的な共同体や垂直的人間関係であっても、異なる種類の規範や信頼に基づき協力が達成される。つまり、異なる性質のソーシャル・キャピタルが存在するといえる。

一方で、仮に上記の対応関係を前提とするならば、家族内の男女間における不平等な権力関係が是正されること、例えば、女性の労働参加やケア労働の制度的代替は、平等の促進や水平的な関係の形成として、ソーシャル・キャピタルの衰退ではなく、市民共同体への一歩として捉えられる。しかし、伝統的な家族の形に基づく連帯を評価するようなパットナムの保守的な主張は、不平等な権力関係を無視した共同体の美化であり、水平的人間関係に伴ってソーシャル・キャピタルが形成されるという市民共同体の理論と矛盾する。したがって、パットナムの言説は、一貫性に欠けるといえる。

レヴィは、パットナムによる不十分なソーシャル・キャピタル概念の発展、共同体の美化、そして他の要素を無視した断固とした社会中心的（society-centered）な観点が、ソーシャル・キャピタルの代替的な形態、利用そして源泉を認識するのを困難にしていると批判する。信頼や互酬性、特に調整は、垂直的な関係においても育成されると述べ、その例として、階層的な教会や企

業、政府をあげる（Levi, 1996）。

パットナム概念では、共同体の美化、ソーシャル・キャピタルの定義と市民共同体との関係における曖昧さが、ソーシャル・キャピタルとはいったい何かを認識することを困難にしている。ソーシャル・キャピタルという定義から考えれば、垂直的な人間関係でもソーシャル・キャピタルは存在しているが、パットナム概念では、垂直的な人間関係のなかで協力を可能にするソーシャル・キャピタルを捉えることができない。さらに、共同体によく見られる密なネットワークが不信の源泉にもなるという点は、ソーシャル・キャピタルの異なる性質についての検討が必要であることを示しており、それは、橋渡し型ネットワークと結束型ネットワークの類型だけでは不十分である。

一方で、このようなパットナム概念が抱える課題に対して有効なアプローチを提示している理論として、フランシス・フクヤマ（Francis Fukuyama）によるソーシャル・キャピタル概念があげられる。フクヤマのソーシャル・キャピタル概念では、社会集団内での人間関係のあり方ではなく、協力をどのようにして達成するか、特に、内と外という観点からソーシャル・キャピタルの性質を区別している。

2-2. フクヤマのソーシャル・キャピタル概念—正の外部性と負の外部性—

パットナムに対してフクヤマは、ソーシャル・キャピタルを「二人もしくはより多くの個人の間での協力を促進する具体化されたインフォーマルな規範」と定義する（Fukuyama, 2001, p 7）。規範は、「二人の友人の間の互酬性の規範から、手間をかけて精巧に統合されたキリスト教や儒教のような教義にまで及ぶ」（Fukuyama, 2001, p 7）。

フクヤマは、規範以外の信頼やネットワーク、また市民社会は、ソーシャル・キャピタルの結果として生じ、さらに、ソーシャル・キャピタルは、負の外部性を持つものと正の外部性を持つものとに分類されると述べる。正の外部性を伴う規範の例として、家族や血縁者だけでなく全ての人を道徳的に扱うよう命じる清教徒主義の禁止命令を、負の外部性の例として、クー・クラックス・クラン（KKK）やマフィアをあげる。

清教徒主義の規範の場合、なぜ正の外部性が生じるかという点、その規範によって協力の潜在的な可能性が、規範を共有している近しい集団を越えて広がるからである。その一方で、多くの集団は、疑いや敵意、あからさまな憎しみを伴って、現れる外部者を犠牲にしながら内部の団結を達成する。このような場合には、負の外部性が生じる。ソーシャル・キャピタルを持っていても、それらが埋め込まれているより大きな社会で大量の負の外部性を生み出す（Fukuyama, 2001）。

さらにフクヤマは、外部性を表すもう一つのアプローチとして「信頼の範囲（Radius of trust）」の概念を提示する。ソーシャル・キャピタルを持つすべての社会集団は、ある特定の信頼の範囲を持っており、それは協力の規範が効力を持つ人々同士の円を意味する。ソーシャル・キャピタルが正の外部性を持つ場合には、信頼の範囲はその集団よりも大きくなる。

一方で、負の外部性を持つ場合は、協力と同様に信頼の範囲もまた、特定の規範の共有という基盤に限定される。フクヤマによると、伝統的文化のすべての形、例えば、種族、氏族、村のアソシエーション、宗教派閥のような社会集団は、共有の規範に依存し、そして協力とその範囲に限定されるようにこれらの規範を用いる。集団内の強固な連帯が、外部者と協力する能力を低下

させ、負の外部性を課す。

「伝統的な社会集団は、マーク・グラノヴェッターが『弱いつながり』と呼んだものの欠如に苦しむ。それは、集団間を移動し、新たなアイデアと情報の使者となる社会の様々な社会的ネットワークの周辺にいる異質な個人の欠如である。伝統的な社会は、しばしば分断的で、村や部族のように等しく内にこもった社会集団によって構成されているのに対し、近代社会は多数のメンバーやアイデンティティを許容する重なりあった社会集団の多くで構成されている。したがって、伝統的社会は、情報、イノベーション、人的資本が伝わりづらいのである」(Fukuyama, 2001, p 9-10)。要するに、負の外部性を伴う社会関係資本を有する社会集団は、新たな情報やイノベーション、そして人的資本を得る機会を失っているということである。

2-3. 小括

ここまでの議論で示されたいくつかの論点について、改めて整理すると、以下のようにまとめることができる。

パットナムは、垂直的關係で構成されるような伝統的な共同体ではソーシャル・キャピタルが存在しないと述べたが、フクヤマは、協調行為や協力という観点からみると、異なる性質のソーシャル・キャピタルが垂直的關係を伴う伝統的な共同体では形成されると述べる。

フクヤマ概念の場合、ソーシャル・キャピタルは、水平的人間関係に限定されず、垂直的人間関係や階層性を持つ社会集団においても形成されるが、正の外部性と負の外部性という異なる二つの性質に基づき分けられる。レヴィが指摘した共同体の密なネットワークが外部者との間で不信の源泉になるという側面は、フクヤマの負の外部性として捉えることができる。

フクヤマのソーシャル・キャピタル概念の有効性は、協力や協調行為がどのようにして達成され、どのような影響や効果を持つのかという質的側面について言及している点にある。ソーシャル・キャピタルの性質を規範が決定し、その相違を区別する軸は、内と外という観点である。それは、閉鎖性や排他性でもあり、異質な外部者を包摂するか、それとも外部者を犠牲にしながら集団内での協力や利益を優先するかどうかの違いである。このような観点から見た性質の相違は、信頼の性質、すなわち、信頼の範囲が広いか狭いかということ、そして、ネットワークの形態や性質を左右する。例えば、負の外部性の場合に形成されるネットワークは、結束型であると考えられる。

橋渡し型と結束型のネットワークという類型のみでは不十分だという背景には、家族や親しい友人というネットワークが、結束型ネットワークとしてあらゆる社会に存在するけれども、負の外部性を伴う場合とそうでない場合を識別することができないからである。スヴェンソン・スヴェンソン (Svendsen and Svendsen 2009) は、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) のソーシャル・キャピタル論をふまえながら、パットナムの結束型ネットワークをさらに、厚い信頼を伴う家族や親しい友人といった原初的なネットワークと負の外部性を伴うマフィアや KKK などの過度な結束型の二つに分ける。しかし、家族であっても過度な外部性を伴う場合は存在する。例えば、ラテンアメリカでは、家族や親しい友人の優遇という正義のもとに身内ひいきが正当化されたことで腐敗をもたらした (Fukuyama, 2001)。家族や親しい友人というネットワークは、どのような社会でも存在するが、そのネットワークがどのような性質を持つかは、それらを取り巻く

社会構造に大きく影響を受ける。正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルが相対的に強い場合には、家族や友人同士の親しいネットワークが存在しないのではなく、外部者を犠牲にするような負の外部性や排他性が緩和されるということの意味する。言い換えれば、それは社会における透明性の増加であって、その場合、社会的な取引費用の引き下げ効果による経済取引の円滑化や財政的な費用の削減につながる。また、原初的なネットワークの例としてあげられる家族の形態は、現在、国ごとに異なり、多様化している。

一方で、内部での人間関係が階層的もしくは垂直的なのか、それとも水平的なのかということが、その組織の凝集性、さらには、正の外部性と負の外部性にどのように連関するのかという点については、さらなる検討が必要とされる。

特に階層性は、二重の意味を持ちうる。それは、構造としての純粋な階層性と不平等な権力関係を伴う階層性である。階層的であるが効率的な調整を行う社会組織の例として、企業があげられるが、この場合は、構造としての階層性が経済的利潤の拡大をもたらす効率性を改善するために、垂直的な構造がポジティブに評価される。しかし、その効率性は、技術革新と産業構造の状況に大きく影響されるため、階層性の効果は変化する。近年は、産業の高度化に伴い、階層性の利点は失われつつあり、よりイノベーションに適した関係性が望まれている。

また、これまでの議論を踏まえると、不平等な権力関係を伴うような階層性、垂直的關係は、排他性が強く、負の外部性を伴いやすいということが考えられる。なぜなら、このような不平等な権力関係は、その集団内における独自の慣習や規範に支えられており、その規範を共有していない場合は協業を困難にするだけでなく、時に集団の外への開放が、不平等な権力関係の崩壊につながり得るからである。

最後に、ソーシャル・キャピタルの経済的機能についてである。一つは、正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルであれば、外部者を受け入れることで新しい技術、イノベーション、人的資本を獲得することが可能となるという点である。これは、もう一つの経済的機能である取引費用の低減とも関わる。取引費用の場合、ソーシャル・キャピタルを有していれば、正の外部性であっても負の外部性であっても、集団内では信頼をもつため取引費用は低下する。むしろ、内部での凝集性が高い、負の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの方が、取引費用は最小化すると考えられる。その一方で、外部者との取引費用が増大することによって、外部者との協力の機会、新しい技術やイノベーション、人的資本を得る機会を失う。すなわち、高い機会費用が発生する。正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの場合、凝集性が高まりやすい負の外部性を伴うソーシャル・キャピタルと比較すると、取引費用の減少の程度は相対的に低いかもしれないが、確かに取引費用は削減され、また機会費用も低い。一方で、負の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの場合、取引費用は低減されるが、機会費用は非常に高くなる。また、閉じた社会での規範や慣習が人々を拘束し、足の引っ張り合いという非効率的な協調行為を導く場合も考えられる。

パットナムのソーシャル・キャピタル概念に限らず、ソーシャル・キャピタル研究は、定義がとらえにくくわかりづらいゆえに、普遍的な測定手法や指標が確立されていないこと、そして、多義的な概念で、未だ、どの側面が発展の多様な側面にポジティブな効果を与えるのかということが不明瞭だという課題に悩まされてきた (Sabatini, 2009)。しかし、本節で提示した、フクヤマのソーシャル・キャピタル概念は、上記のような、ソーシャル・キャピタルの多義性に伴う不明

瞭さを理論的に整理する有効なアプローチだといえる。

3. 国家と制度の役割—スウェーデンのソーシャル・キャピタルと福祉国家—

本節では、ソーシャル・キャピタルと国家と制度の関係を、特に福祉制度という観点から検討する。パットナムの理論分析は、特に『哲学する民主主義』において、他の重要な活動主体、とりわけ政府を無視した強固な社会中心型（society-centered）であった（Levi, 1996）。『孤独なボウリング』では、ソーシャル・キャピタルの源泉の一つとして政府をあげるが、国家の制度がソーシャル・キャピタルを育成する側面について十分な検討がなされていない。

前節で、ソーシャル・キャピタルの性質の相違を捉える有効な概念として提示したフクヤマの理論も、社会中心である点は共通している。フクヤマの場合、国家の役割をパットナムよりもさらに消極的に捉えており、国家がソーシャル・キャピタルを育成する手段をほとんど持たないことを前提とした上で、唯一、教育と財産権の保護のみ国家に残された手段であると述べる。

しかし、国家、そして公的な制度がソーシャル・キャピタルに対して大きな影響を与える側面は決して無視できるものではなく、特に、国家制度による高い水準での福祉サービスの供給は、単にソーシャル・キャピタルの源泉となりうるだけでなく、正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルを育成する制度的基盤となる。本節では、普遍主義的福祉国家の制度が、ソーシャル・キャピタルの形成にどのような影響を与えるのかという点について、スウェーデンのソーシャル・キャピタルの分析から明らかにする。

3-1. 普遍主義的福祉国家の機能

スウェーデンにおいて国家や制度を考える場合、それは福祉国家の議論となる。スウェーデンは、エスピン＝アンデルセンの福祉国家レジームで、社会民主主義レジームに分類され、普遍主義的福祉国家と呼ばれる（エスピン＝アンデルセン, 2001）。

スウェーデンにおける福祉国家の歴史的起源は、社会民主党による「国民の家」概念に始まるが、その制度的枠組みは、これまでの長い歴史のなかで、何度も修正され、1990年代の金融危機を経て大きく改革されたが、現在でも、世界的にみて相対的に高水準の福祉が普遍的に供給されている（宮本, 1999；湯本・斎藤, 2011；岡澤・斎藤, 2016）。

そして、このような普遍主義的福祉国家をもつスウェーデンが、市民社会に付随して議論されるソーシャル・キャピタル概念とその潮流に対して、矛盾を提示するとボー・ロートシュタイン（Bo Rothstein）は述べる。その理由として、しばしば大きな国家として考えられる普遍主義的な福祉制度をもつスウェーデンが、一方でソーシャル・キャピタルの豊富な国としても特徴付けられる点を指摘する。そして、むしろ普遍主義的福祉国家がソーシャル・キャピタルの創造を促すという主張を、以下の二つの側面から説明する。

第一に、福祉供給という社会生活の基礎的な部分において、不平等な扱いやスティグマを発生させない仕組みを持つという点である。クムリン・ロートシュタインは、市民的積極参加のネットワークによって、信頼や互酬性の規範が生じ、かつ波及するというパットナムの主張に対して、

実際には、信頼が、自己形成過程を通して得られ、そうして高い信頼を得た人々が市民的積極参加に従事すること、加えて、組織団体の形成が不信にあふれた社会の中でむしろ形成されることが多い点を指摘した。そして、制度設計、特に普遍主義的な福祉制度が信頼を構築するための基礎的状态を形成すると主張した。制度設計の差異に基づいた行政の手続き上における不公平さや差別、腐敗の程度が転じて個人間の信頼にどのように影響するかという視点から、普遍主義的福祉制度の場合には、不公平や差別的な扱いを受けたと感じる頻度が減少することで、個人間の信頼が形成されやすいことを実証しようと試みた (Kumlin & Rothstein, 2005)。

第二の理由は、普遍主義的福祉国家の再分配機能に基づく。普遍主義的福祉国家を伴うスウェーデンでは、ソーシャル・キャピタルを破壊する経済格差が小さいために、⁴⁾ ソーシャル・キャピタルが形成されやすいと述べる (Rothstein, 2008)。

またラーズ・トレーゴード (Lars Trägårdh) は、スウェーデンでは、個人が国家の制度を通して、家族と社会の間にある従属と依存の規範から解放されたと分析する。それは、例えば協会から貧困者を、夫から妻を、両親から子供たちを解放することを意味する (Berggren & Trägårdh, 2011; Trägårdh, 2007a)。スウェーデン・モデルとは、「強くて良い国家と社会的な抑圧や束縛から自由で自律した個人との間の社会契約」として特徴付けられ、したがって、スウェーデン社会は、完全にはないが、国家が個人の自由に対して脅威とならないヘーゲルの理論に適合する (Trägårdh, 2007a)。

このような個人の解放は、家族における経済的な相互依存性やそれに伴う不平等な権力関係の最小化であって、人々の親密なつながりを断ち切ることを意味するわけではない (みゆきポワチャ, 2011)。個人の経済的自立の保障は、各人各様の異なる立場やさまざまな生き方に対して寛容な精神を育むことを可能にし、⁵⁾ 家族にかかわる人間同士の強いられたネガティブな関係を解体する (みゆきポワチャ, 2011)。

では、このようにして形成されたスウェーデンのソーシャル・キャピタルとは、どのようなソーシャル・キャピタルなのであろうか。

3-2. スウェーデンのソーシャル・キャピタル

スウェーデン社会は、しばしば高い社会的信頼と、高い公的機関への信頼という二つの点に特徴づけられる。⁶⁾ また、そのほかにも、平等、連帯、自律、個人主義といった社会的特徴があげられる。ヘンリック・バリグレンとトレーゴードは、その社会的特徴のなかでも特に、徹底的な個人主義そして個人の自律に着目する。上記したように、家族にかかわる不平等から人々が解放されたことで、個人の自律や社会的平等が可能となった。「国民の家」構想に始まる普遍主義的福祉制度の形成、さらには個人単位の課税や家族法の改革などによって、個人の自律を制度化してきたために、個人の自律を重んじながら、他者の相違に寛容な規範がもたらされた (Berggren & Trägårdh, 2011)。

そのような個人主義を、ロートシュタインは「連帯主義的個人主義」と呼ぶ (ロートシュタイン, 2013, p 264)。ロートシュタインは、スウェーデンのネオ・コーポラティズムが解体される前と後のソーシャル・キャピタルを比較し、より垂直的な信頼から「連帯主義的な個人主義 solidaristic individualism」へとその性質が移行したと述べる。連帯主義的な個人主義とは、「他

人への支援を進んで行いが、その人々が異なる価値観を持ち、異なる理由から参加することを受け入れる諸個人」を意味する(ロートシュタイン, 2013, p 264)。連帯は常に集団主義を含意するわけではない。

山岸俊夫は、信頼と安心という概念を提示して、集団主義社会は安心を生み出すが信頼は破壊すると述べる。山岸の定義では、「『信頼 (trust)』は、相手が自分を搾取しようとする意図をもっていないという期待の中で、相手の人格や相手が自分に対してもつ感情についての評価にもとづく部分」, 「『安心 (assurance)』とは、相手が自分を搾取する意図をもっていないという期待の中で、相手の自己利益の評価に根ざした部分」を意味しており、この区別は、フクヤマの正と負の外部性にも対応している(山岸, 1998, p 39)。山岸は、フクヤマの概念における、正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの場合に、規範の共有がなくても形成されるものを信頼、規範の共有という前提のもとに形成されるもの、すなわち負の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの信頼を安心と呼ぶ。山岸によると、信頼とは、信頼 (trust) と信頼性 (trustworthiness) に分けられ、信頼性の反映として信頼を捉えるような主に経済学者および合理的選択論者によってなされる議論は、実際のところ安心の議論に対応する(山岸, 1998)。

山岸およびフクヤマの概念は、規範や慣習の共有という対象の信頼性と信頼する側の性質を区別し、規範を共有していないような異質な個人を信頼するかどうかという観点を重視する。スウェーデンの場合、連帯主義的個人主義という性質を踏まえると、異質な個人を受け入れる正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルが形成されやすいと考えられる。スウェーデンの社会的特徴の一つである高い信頼は、単に高いだけではなく、その性質として、一般的信頼である、もしくは信頼の範囲が広いと解釈することができる。実際に、スウェーデンの信頼は、家族や親しい友人、同じ国籍の人だけではなく、見知らぬ人や、異なる国籍、宗教の人といった多様な人々を包摂している(Torpe & Lolle, 2011)。

以上の議論を踏まえると、国家の制度、特に福祉制度を整備することは、ソーシャル・キャピタルを育成するという効果を持ちうる。そして、普遍主義的福祉制度の場合、単にソーシャル・キャピタルの蓄積を促すのではなく、個人の自律の基礎となって、異なる価値観や背景をもつ他者、または外部者の受け入れを可能にすることを踏まえると、正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの源泉となるといえる。スウェーデンでは、普遍主義的福祉国家が社会的平等と自由という二重に重要な意味を持ったスウェーデンのイデオロギーを形成することを可能にし(Trägårdh, 2007a)、個人が自律して自由に社会や政治に参加しながら、水平的な人間関係に伴う連帯や信頼、そして規範を形成できる環境を整えたといえる。したがって、第2節で考察した正の外部性を持つ社会関係資本の社会は、国家の法体系と制度をベースにして成立したといえるのである。ヘーゲルの国家論における人倫概念に関係づけることによって、「個人が自律して自由に社会や政治に参加しながら、水平的な人間関係に伴う連帯や信頼、そして規範を形成できる環境」が普遍性を得るのだ、と考えることができる(ヘーゲル, 2001)。

スウェーデンにおける普遍主義的福祉国家と正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの関係は、当然ながら、スウェーデン固有の歴史や環境、例えば、禁酒運動、自由協会運動、労働組合運動といった大衆運動に深く結びついている。スウェーデンの大衆運動は、従来からの封建的地域社会の構造や閉鎖的身分団体から解放された個人が、その自由意志によって、身分・差別・性

の区分によらずに参加する自発的結社のような性質があった（石原，1995；1996；レグランド塚口，2012）。ゆえに，普遍主義的福祉国家と正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの関係がどの程度普遍化できるのかという点については，より一層の検討が必要とされる。しかし，スウェーデンのソーシャル・キャピタルについての分析は，福祉制度という分野において，福祉の供給をソーシャル・キャピタルに任せることが適切な手段とされうるパットナム概念の楽観主義に対し，むしろ国家によって，人々が普遍的に福祉サービスを高い水準で受給できる制度設計を整備することが，ソーシャル・キャピタルに対してもポジティブな影響を与えるという関係を示している。

おわりに

本稿では，パットナムのソーシャル・キャピタル概念について，共同体の美化，そして国家と制度の役割という二つの観点から批判的考察を行った。パットナムの著書は，非常に多くの国々で読まれ，ソーシャル・キャピタルという概念が世界的に広く認知されるきっかけを生み出した。ソーシャル・キャピタル概念そのものは，論者によって様々な定義づけがなされており，すべての人に受け入れられた唯一の定義は存在しないが，パットナムによる定義は，ソーシャル・キャピタル概念として世界で最も浸透しているといえよう。しかし，広く知られたパットナムのソーシャル・キャピタル概念は，様々な問題を抱えており，したがって，多くの研究者によって，あらゆる側面に対して批判がなされてきた。

本稿では，特に，上記の二つの側面を検討しながら，パットナム概念の不完全性を補完する代替的なアプローチとして，フクヤマによるソーシャル・キャピタル概念を提示し，パットナムとパットナムを支持する論者たちの従来の主張に対して高水準の普遍主義的福祉制度が正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルの源泉となりうることを明らかにした。

社会中心なソーシャル・キャピタル論の場合，国家の制度を過小評価したソーシャル・キャピタルへの過度な期待から，福祉サービスの供給においてもソーシャル・キャピタルを強調し，より良い手段として位置づける。しかし，スウェーデンのソーシャル・キャピタルに関する分析をふまえると，これまで家庭内でインフォーマルに担われてきた育児や介護を，国家の制度によって社会化し，代替すること，すなわち，各個人が生まれ持った状況に関係なく，普遍的に福祉のサービスを受けることができるよう制度を整備することが，正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルを形成する基盤となりうる。むしろ，福祉サービスの供給に関して，ソーシャル・キャピタルの役割を強調することは，負の外部性のような排除や不平等をもたらす可能性がある。

ソーシャル・キャピタル概念は，社会的包摂と社会的排除という二面性を持っており，特に，福祉サービスの供給についてソーシャル・キャピタルの働きを強調する場合には，この二面性に対して十分に注意を払わなければならない。活動主体が常に国家である必要はなく，多元的な福祉供給の形が否定されるわけではないが，ソーシャル・キャピタルの性質と限界をふまえた上で，ソーシャル・キャピタルと国家の間の担うべき役割や協業関係を議論する必要がある。ソーシャル・キャピタルは，万能薬ではないのだ。

さらに，本稿では取り組むことができなかったが，グローバリゼーションのなかで，より複雑

化し高度化する産業構造と国境を超えた協業関係を要する経済活動という観点からみても、負の外部性を伴うソーシャル・キャピタルでは、非効率な結果をもたらし得る。ゆえに、正の外部性を伴うソーシャル・キャピタルと経済性との間にはポジティブな関係があると考えられるが、その関係については、ソーシャル・キャピタルの各構成要素の実証と合わせて残された重要な課題である。

また、本研究のソーシャル・キャピタルに関する議論では、近年、パットナムに代わって注目されているピエール・ブルデュー、そしてブルデューの流れを組むナン・リン (Nan Lin) のネットワークとしてのソーシャル・キャピタル概念まで考察が及ばなかった。それは、ソーシャル・キャピタルの構成要素をどれに限定するかということ、そして、「規範・信頼・ネットワーク」という三つの要素がどのように関係するかという議論でもある。Ostrom & Ahn (2009) は、ソーシャル・キャピタルを「信頼性 (trustworthiness)、ネットワーク・制度 (institution)⁷⁾」と定義し、それらが「信頼 (trust)」として現れることで、集合行為が可能になると述べる。Ostrom & Ahn (2009) は、信頼として現れる論理をゲーム理論に基づき説明するが、最終的になぜ人が信頼し、協力を行うのかというその背景全てをソーシャル・キャピタルとして論じている。規範は、どのような外部性や信頼を形成するのに大きく影響を与えるが、実際の直接的なつながりであるネットワークを通して、個人は影響を受け、規範を変化させることもあるだろう。「規範・信頼・ネットワーク」という三つの要素は、不可分に結びつき、それらは全て互いに連関しながら、協力という結果を左右すると筆者は考えるが、三つの要素の相互関係については、さらなる検討が必要である。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 JP16J06689 の助成を受けたものです。

注

- 1) ソーシャル・キャピタルとは、インフラストラクチャーを意味する「社会資本」ではない。日本語訳は、社会関係資本である。
- 2) 市民的積極参加とは、市民として公共問題に関心を持って、幅広い公衆のニーズを私的な利益に優先させて行動し、公的諸問題に積極的に関与することを意味する。具体的には、投票率などで表される政治参加があげられる。
- 3) 二種類の互酬性のうち「一般的互酬性」について、原文では『哲学する民主主義』と『孤独なボウリング』の両著において、どちらも 'generalized reciprocity' となっている一方で、日本語翻訳版の場合、『哲学する民主主義』では「一般化された互酬性」、『孤独なボウリング』では「一般的互酬性」と異なって訳されている。ここでは、「一般的互酬性」に統一する。さらに、どちらの互酬性も、『哲学する民主主義』から『孤独なボウリング』の間で、概念がより広義になっている。『哲学する民主主義』において、特定の互酬性は、「同じ価値品目の同時交換」であったし、一般的互酬性は、「ある時点では一方的あるいは均衡を欠くとしても、今与えられた便益は将来には返礼される必要がある」という、相互期待を伴う交換の持続性」であったが、『孤独なボウリング』では、本文にあるような定義へと発展している (パットナム, 2001, p 213)。
- 4) 経済格差がソーシャル・キャピタルを破壊することを主張する先行研究としては、例えば、稲葉 (2016) や Uslander (2002) があげられる。
- 5) スウェーデン社会の寛容性を示す一つの例として、難民を含む移民の受け入れがあげられる。森・

- 大塚・秋山・星野 (2012) は、スウェーデンでのアンケート調査に基づき、日本との比較研究を行うことで、スウェーデンの移民に対する寛容性が相対的に高いことを実証的に示した。
- 6) 社会的信頼については世界価値観調査、また、公的機関への信頼については、OECD の調査データが参考としてあげられる。
- 7) オストロムは、ダグラス・ノースに従い、制度をゲームのルールとして広義の意味で捉えており、インフォーマルなルールからフォーマルなルールまでを含んでいる (Ostrom & Ahn, 2009)。

引用文献

- イエスタ・エスピン＝アンデルセン (岡沢憲美・宮本太郎訳) (2001). 『福祉資本主義の三つの世界—比較福祉国家の理論と動態—』 ミネルヴァ書房.
- 石原俊時 (1995). 「スウェーデン社会民主主義の歴史的展開」 西川正雄, 松村高夫, 石原俊時著『もう一つの選択肢』 平凡社.
- 石原俊時 (1996). 『市民社会と労働者文化—スウェーデン福祉国家の社会的起源—』 木鐸社.
- 稲葉陽二・吉野諒三 (2016). 『ソーシャル・キャピタルの世界—学術的有効性・政策的含意と統計・解析手法の検証—』 ミネルヴァ書房.
- 上妻精・佐藤康彦・大塚信一訳 (2001) 『ヘーゲル全集9b 法の哲学下巻』 岩波書店.
- 岡沢憲美・斎藤弥生 (2016). 『スウェーデン・モデル—グローバル化・揺らぎ・挑戦—』 彩流社
- 岡沢憲美・中間真一 (2006). 『スウェーデン—自律社会を生きる人々—』 早稲田大学出版部.
- ロバート・D・パットナム (2013). 「スウェーデン—社会民主主義国家における社会関係資本—」 ロバート・D・パットナム編, 猪口孝訳『流動化する民主主義—先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル—』 ミネルヴァ書房, 248-284.
- みゆきボワチャ (2012). 「“高福祉社会は家族を解体させる”を検証する」 レグランド塚口淑子編『「スウェーデン・モデル」は有効か—持続可能な社会へむけて—』 ノルディック出版, 317-346.
- 宮本太郎 (1999). 『福祉国家という戦略—スウェーデンモデルの政治経済学—』 法律文化社.
- 森恭子・大塚明子・秋山美栄子・星野晴彦. (2013). 「移民への寛容意識に関する日本とスウェーデンの比較調査研究」 文教大学人間科学研究, (34), 141-158.
- 山岸俊男 (1998). 『信頼の構造—ところと社会の進化ゲーム—』 東京大学出版会.
- 湯元健治・佐藤吉宗 (2010). 『スウェーデン・パラドックス』 日本経済新聞出版社.
- ロバート・D・パットナム (河田潤一訳) (2001). 『哲学する民主主義—伝統と改革の市民構造—』 NTT 出版株式会社.
- ロバート・D・パットナム (柴内康文訳) (2006). 『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—』 柏書房.
- ロバート・D・パットナム, クリスティン・A・ゴス (猪口孝訳) (2013). 「序章 社会関係資本とは何か」 ロバート・D・パットナム編, 猪口孝訳『流動化する民主主義：先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル』 ミネルヴァ書房, 1-17.
- レグランド塚口淑子 (2012). 「スウェーデン・モデルのルーツをたどる」 レグランド塚口淑子編『「スウェーデン・モデル」は有効か—持続可能な社会へむけて—』 ノルディック出版, 21-47.
- Eklund, K., Berggren, H., & Trägårdh, L. (2011). The Nordic Way. In Report presented at World Economic Forum, Davos.
- OECD (2013), “Trust in government”, in Government at a Glance 2013, OECD Publishing, Paris.
- Ostrom, E. & Ahn, T.K. (2009). The meaning of social capital and its link to collective action. In G. T. Svendsen (Ed.), & G. L. H. Svendsen (Ed.), *Handbook of social capital: the trioka of sociology, political science and economics*. Edward Elgar Publishing, 17-35.
- Fukuyama, F. (2001). Social capital, civil society and development. *Third world quarterly*, 22(1), 7-20.

- Jepperson, R. L. (2002). Political modernities: Disentangling two underlying dimensions of institutional differentiation. *Sociological Theory*, 20(1), 61-85.
- Kumlin, S., & Rothstein, B. (2005). Making and breaking social capital the impact of welfare state institutions. *Comparative political studies*, 38(4), 339-365.
- Levi, M. (1996). Social and unsocial capital: A review essay of Robert Putnam's *Making Democracy Work*. *Politics and Society*, 24(1), 45-55.
- Rothstein, B. (2002). Social capital in the social democratic state. In R. D. Putnam (Ed.), *Democracies in flux: The evolution of social capital in contemporary society* (pp. 289-331). Oxford University Press.
- Rothstein, B. (2009). The universal welfare state. In G. T. Svendsen (Ed.), & G. L. H. Svendsen (Ed.), *Handbook of social capital: the troika of sociology, political science and economics* (pp. 197-211). Edward Elgar Publishing.
- Sabatini, F. (2009). Social capital as social networks: A new framework for measurement and an empirical analysis of its determinants and consequences. *The Journal of Socio-Economics*, 38(3), 429-442.
- Svendsen, G. T., & Svendsen, G. L. H. (2009). The troika of sociology, political science and economics. *Handbook of Social Capital. The Troika of Sociology, Political Science and Economics*, Cheltenham, Edward Elgar, 1-13.
- Torpe, L., & Lolle, H. (2011). Identifying social trust in cross-country analysis: do we really measure the same?. *Social indicators research*, 103(3), 481-500.
- Trägårdh, L. (2007a). Democratic governance and the creation of social capital in Sweden: The discreet charm of governmental commissions. In L. Trägårdh (Ed.), *State and civil society in Northern Europe: the Swedish model reconsidered*. Berghahn books.
- Trägårdh, L. (2007b). The "civil society" debate in Sweden: the welfare state challenged. In L. Trägårdh (Ed.), *State and civil society in Northern Europe: the Swedish model reconsidered*. Berghahn books.
- Uslaner, E. M. (2002). *The moral foundations of trust*. Cambridge University Press.
- WORLD VALUES SURVEY Wave 6 2010-2014 OFFICIAL AGGREGATE v.20150418. World Values Survey Association (www.worldvaluessurvey.org). Aggregate File Producer: Asep/JDS, Madrid SPAIN.)